附属学校の立地を活かした大学・学部との共同研究

～山口大学教育学部と附属光小・中学校の場合～

吉川　幸男

はじめに

同校種の附属学校を複数有する教員養成大学・学部においては、学校ごとに存在意義や役割、特色を明確にすることが「有識者会議報告書」においても求められている。山口大学においては山口市に附属山口小学校、附属山口中学校、附属幼稚園、附属特別支援学校、光市に附属光小学校、附属光中学校の計6校園を有するため、各2校となる附属小学校と附属中学校それぞれに存在意義や役割、特色が求められる。

そもそも同校種の附属学校を複数有することの意義は何か。附属学校が地域の教育課題に取り組むモデル校であろうとするならば、複数校を有することは地域的多様性に応え得る強みがある。今日、地域によって立地環境、学校規模、施設設備等きわめて多様な学校の実態の中で、附属学校が「一般的・平均的なモデル」を構築する教育研究のみでは地域に還元できるものは少なく、複数校で異なるモデルをめざすほうが地域の実態に即して有益であろう。その意味で複数校それぞれの立地や形態は、どのようなモデルを構築するかを左右する大きな要因であり、そこにそれぞれのモデルに対する大学・学部との共同研究の在り方が関わってくる。

本学附属学校園のうち、附属山口小・中学校が立地する地区は山口市の中心市街地であり、市役所、県庁など官公庁のほか、商店街も至近距離にある。全国の国立大学附属学校の多くはこのような立地にあり、その点では本学も例外ではない。これに対して附属光小・中学校の立地は、江戸時代から北前船寄港地として栄えた旧室積町にあり、往時を物語る史跡も多い。学校は瀬戸内海に突き出た小さな半島の先端にあり、敷地は原生林を含む樹林と波静かな内海に面している。このような立地の附属学校は他に例がなく、おそらく全国で唯一の存在と思われる。小・中学校は同じ敷地に建てられており、建物内の区画はあるが会議室や体育館、運動場等、施設は小・中学校で共用することも多く、校長及び事務職員は小・中学校共通である。教員も小・中学校として一つの研究課題のもとで授業を進めており、将来的には小・中学校職員室の統合も検討されている。

以下では、国立大学附属学校としてはきわめて特異な立地にある附属光小・中学校に焦点を当て、市街地に立地する附属山口小・中学校との対比した場合の特色と、その特色を踏まえて実施される大学・学部との共同研究について述べる。

1.「遠隔附属」と教員養成・教員研修の研究

附属光小・中学校は教育学部から 70 キロ余り、約1時間半の距離にあり、教育学部と同じ山口市内にある附属山口小・中学校と比べると、学部カリキュラムと連動した教員養成の研究、教職大学院の実地授業、学部との共同研究等に、移動時間のために大きな不利益を背負っている。

この状況に対応して本学では、2013 年度から一部教科で、ネットワーク回線を活用して附属光小・中学校の授業を学部に実況中継し、その中継を教員養成学部学生が視聴したり、授業を担当した教員と学生が質疑を重ねる演習授業が行われてきた。また、小・中学校で行われた授業実践の映像記録をライ

ブラリ化して Web 上に蓄積しておき、学部の授業で活用することも試みられている。教員養成段階の特に1～2年次の学生にとって、附属学校教員が十分構想を練って実践した研究授業にふれることは、学生の経験上形成してきた授業観を揺さぶり、深化させる効果をもつことがこの数年の蓄積で浮上してきており、教員養成の研究として「遠隔附属」の活用も決して不利ではない状況になってきている。さらには、このような「遠隔附属」の特色を逆に生かしてオンラインを活用した教員養成・教員研修のモデルを構築することは、今日の新型コロナ対応の状況下においてむしろ求められる課題でもあり、県内の学校教育・教員研修に寄与できる側面がある。

2.「統合型附属」と小・中学校カリキュラムの研究

附属小学校と附属中学校の位置関係については、全国的にも、両校が同敷地に立地している統合型と、それぞれ別に立地している分離型がある。本学の場合は附属山口小・中学校が近隣ではあるが分離型、附属光小・中学校が統合型であり、同じ大学で異なる立地型の附属学校を有するが、このような例は全国でも数例しかない。しかしこのことが、カリキュラム研究上の大きな強みでもある。両附属学校で小中一貫カリキュラム（山口附属学校の場合は幼稚園を含めた幼小中）の開発研究を行っているが、分離型の場合、小・中で共通の教育目標を掲げながらも小学校カリキュラムとして一旦完結し、それを引き継いで中学校カリキュラムが展開する。これに対して統合型の場合、9年間をかけて継続的な指導が貫かれるカリキュラムが開発され、そのための教員組織や学校行事の構成に向けた試みが行われる。県内各地域の小・中学校も分離型・統合型の両タイプが存在しているため、附属学校においても両タイプが存在することが地域貢献に重要な意味を有することになる。

附属光・小中学校における大学・学部との共同研究には、このような統合型の小中一貫カリキュラム開発の面から、種々の試みが行われている。例えば、学部の保健体育教室の教員・学生が陸上競技の指導や調査研究活動を行ったり、学部の音楽の教員による合唱指導に関する研究、大学の防災関係専門家と連携した防災訓練、キャリア教育研究に関する一環としての大学・学部見学と実地演習及び「働くこと」に関する講話など、いずれも小・中学校の学年段階を意識した教育的働きかけが行われている。課題としてはこのように教科・領域ごとに五月雨的に実施されている各種の試みを一貫教育カリキュラムへと組織化していくことであるが、あまりシステマティックになりすぎると、このような各分野での自由な発想を活かした試みが窮屈なものになりかねず、その点の留意が必要である。

3.「田園型附属」と教育実践の研究

附属光小・中学校では、上述のような立地環境が教育研究主題に影響したのかどうかは定かでないが、市街地に立地する附属山口小・中学校とは幾分異なる研究視点に立った教育実践が積み重ねられてきた。附属山口小・中学校では、子ども・教師・地域（家庭）の「ひびき合いのある学校」「考え続ける生徒を育てる」など、周囲の環境に対して自分はどう考え、対処してゆくかという「自己・対象・仲間」のヨコの関係に重点を置いた主題が掲げられることが多く、いかにも様々な人や情報が行き交う市街地らしい主題になっている。現在、附属山口小・中学校は附属幼稚園を加えて「幼・小・中一貫教育」に取り組んでいるが、ここでも「対象・自己・他者」の三者関係が幼・小・中を貫く柱として設定されている。

これに対して附属光小・中学校では、「真理を追究し続ける」「新たな価値を創造する」等の育成目標を掲げ、その下に「学びの筋道」「つながる授業」「思考を深める学びのリンク」等の方法的キーワードを掲げてきた。学習集団として目標に接近し続けるためのタテの成長路線に重点が置かれることが多く、「学習

の協働的自主管理」ともいえる方向が伝統を形づくってきた。現在、義務教育9年一貫教育に取り組んでいるが、ここでも「知を愛する」「共にある」という両輪を9年間かけて発展させるような一貫カリキュラムの開発がめざされている。このことを「市街地型附属」とは異なる「田園型附属」として特徴付ける根拠はあまり強固ではないが、往来から隔絶された、天然記念物の樹林と海浜を臨む自省的・観照的な立地環境が多少なりとも影響しているのかもしれない。

頻繁な出入りはないが、一度訪問するとじっくり語り合えるという環境は、共同研究においても生かされている。附属光小学校は地域の教員研修として例年夏休み期間に「授業について語り合う会」を開催してきた。定例の研究発表大会や公開授業研究会においても、参加者と「質疑」の形式ではなく「ちゃぶ台」型の円卓談話形式を維持してきた。これらの研究的行事に象徴されるように、附属光小・中学校の場合、「モデルとしての附属学校」が要請される中にあっても、決して「権威的なモデル」ではなく「語り合えるモデル」という姿勢を貫いてきた。この点は大学・学部との共同研究においても変わらない。例えば学部教員数名からなるグループは、このような光小・中学校の「語り合い」（ナラティブ）に、授業研究の方法としての独創性を見出し、附属光小・中学校教員との授業実践に関する「語り合い」を通して小中一貫カリキュラムを構築してゆく研究で科学研究費（基盤研究（B））を申請し、採択されている。

また、附属光小・中学校は校舎・運動場が海浜に面している全国唯一の附属学校である。この環境を取り込んだ特別活動や総合的学習は近年継続的に行われており、ここに学部教員が加わって共同研究に発展するケースがある。例えば海洋生物に関する調査活動を行う中でマイクロプラスチックによる海洋汚染問題が子どもたちの関心を高め、環境問題に関する継続的な活動への取り組みに発展してきた。これに対して学部の生物学教員が加わり、子どもたちと共に海中のプランクトン及びマイクロプラスチックの含有量を調査する研究へと発展しつつある。この活動はさらに教員養成課程の学生が参加したり地域の人々も巻き込み、「海浜附属」としての特色ある共同研究になる可能性もある。また将来的には地域の素材を生かした教材・教育内容開発として小・中一貫カリキュラムに消化できれば、このスキームが地域の学校におけるカリキュラム・マネジメントの一つのモデルになるものと期待される。

（山口大学教育学部附属学校担当副学部長）